

猫神主人と犬神大戦争

桔梗 楓 Kaede Kikyo



アルファポリス文庫

月のない夜。空には薄雲がかかっている、星も見えない。

まるで黒の絵の具を零したような空の下で、ケモノのうなり声が不気味に響いた。

「うなあくぐるお〜フシヤー！」

「ヴウウー……！！ グルルル」

狭い歩道を戦場に、睨み合うケモノたち。

片方は猫の群れ、もう片方は犬の群れだ。

それぞれが牙を剥き出し、低い鳴き声と共に、頭を少し下げ、尾を上げる威嚇の体勢を取っている。

「新月は、わらわの尊き神性がなりを潜め、もつともケモノに近づく夜じゃ。ふふ、血もたぎるといふものよ」

プロローグ 仁義なき、わんにゃんの戦い



猫の軍勢を率^{ひき}いるのは、白く艶^{つや}やかな長毛を夜風になびかせている、ペルシャ猫に似た姿をした猫、ウバだ。その瞳は金色で、月のない夜であつてもまるで満月のように光り輝^{きら}いていた。

彼女は猫であつて猫ではない。その正体は『猫神』という、人を守る猫の神様だ。ウバの周りでは黒猫にアメリカンショートヘア、そして三毛猫たちが、犬の群れを睨^{にら}みつけている。彼らもまた、普通の猫ではない。それぞれ病魔^{びやうま}、猫又^{ねこまた}、仙狸^{せんり}……はるか昔からこの国に存在している鬼や化け猫で、かつては人間相手に悪事を繰り返していたこともあつた。

一方、犬たちは、まるで闇から形を成^なしたかの如き黒色の毛並みに覆^{おお}われていた。目だけが血を思わせるほど真つ赤で、キラキラした光を放っている。

チャカッ、と爪音が響いた。

黒い犬の群れから、一頭の狼が前に出てきたのだ。

他の犬に比べてひとまわり大きく、シベリアンハスキーを思わせる体躯をしている。その毛並みは、ふさふさした白銀色^{はくぎん}の剛毛に覆^{おお}われていた。

「神や鬼、妖怪といえども、所詮は猫。しかも人間に飼^かい慣^ならされて、すっかり牙を

抜かれた状態では、勝負にもなるまい」

フン、と鼻で嘔^わわれ、ウバの傍^{そば}にいた黒猫——キリマが毛を逆立てて殺気を露^あわにする。

「馬鹿にするな。お前の喉笛、この爪で搔^かっ捌^はいてやろうか」

「クク、我が研ぎ澄まされた牙が、お前の頭に食らいつくほうが早いだろう」
すると、キリマの隣にいた三毛猫が、爪音を鳴らして一歩前に出た。

「……試してみるか？ お前たちが、吠えて威嚇^{いかく}するだけしか能^よくない野良犬だということを、思い知らせてやろう」

「望むところだ。今日こそ決着をつけてやる」

パウッ、パウッ！

グルルル……

言葉話を話す狼の後ろには、影を思わせる真つ黒な犬たちがぞろぞろとたむろしている。目の前にいる猫たちを、どう料理してやろうか。

犬たちはそう言わんばかりに赤い舌を伸ばし、舌なめずりをする。

明らかに十匹以上はいる犬の群れに対し、猫の軍勢はたった四匹だ。しかし、その四匹は一步たりとも後ずさりしなかった。

「ウフフ、今宵は血を見ることになりそうね」

アメリカンショートヘアの見た目をした猫が、艶やかな声で呟く。

まさに一触即発の瞬間。

この場において唯一の人間である鹿嶋美来は、目の前で繰り広げられる情景に、呆然と立ち尽くしていた。

「ちよっと、あなたたち、店の前で何やってるのっ！」

悲鳴にも似た抗議の声に、犬も猫も反応することなく、変わらず睨み合っている。

人間はお呼びじゃないということなのだろう。

これは『物の怪』と呼ばれる類の猫と犬が、互いに領地を奪い合う、仁義なき戦い。

敗北した途端に棲み処を失う。

話し合いなど、もはや意味をなさない。

取るか取られるか。互いに譲れない以上、残された道は戦いしかないのだ。

だが、美来にとってはたまったものではなかった。

「ここ、公道だよ!? 夜とはいえ、いつ人が来るかもわからないんだから、保健所を呼ぶどころの騒ぎじゃなくなるよー!!」

「美来。これは避けられない戦いなんだ。けれども俺は絶対美来を守るから」

キリマが思い詰めた様子で言う。しかし美来は首を高速で横に振った。

「そういうことを言ってもらいたくないじゃなくて……」

がつくりと肩を落とす。そうじゃないのだ。

「お願いだからどっちも落ち着いてよ。争いは何も生み出さないって、歴史の授業でも先生が言っていたよ!」

美来が必死に訴えるも、両者は耳を傾けようもしない。

人間の歴史など知ったことではないのかもしれない。美来ははらはらした気持ちで辺りを見回した。すると、犬と猫が睨み合う道の向こうから、酔っ払った様子の中年男性がふらついた足取りで近づいてくる。

「ひえっ!」

美来は慌てた。酔っばらには気持ち良さそうに歌を歌っている。

「ウウ……ガッ」

後方の気配に気づいた狼が、ぐるりと後ろを向いて威嚇の鳴き声を上げた。

「ふんふーん、ふん？」

よたよた歩いてきた中年男性が、犬と猫の群れに気づく。

「フシヤア……」

「グルルル……」

ここに近づくなど言わんばかりに、猫たちは暗闇の中で目を光らせ、影色をした犬たちはギラリと牙を剥き出す。

「ひえええ!! ヒョエー!!」

酔いが一気に覚めたのか、中年男性は猛烈な勢いで逃げていった。

「よ、よかった……。冷静に保健所に電話されたらどうしようかと思った……」

美来は胸を撫で下ろす。中年男性には申し訳ないが、こんなところで保健所に連絡されてしまったら、美来の大切な『ねこのふカフェ』が騒動に関わっていると思われかねない。

「と、とにかく、あなたたちいい加減にして！ 少なくともお店の前では……じゃなくてもどこでもダメだけど、喧嘩はダメ。ストップー!」

またいつ人が通るかもわからない。それに、平和的な解決方法があるはずだ。

美来は懸命に説得しようとする。しかし、その声に反応したのは一匹のみ。

キリマだけが、チラ、と横目で彼女を見上げた。

「美来、家に入ってる。今日の戦いは今までにない激闘になるだろうから」

「キリマ、私の話聞いてた!? どうしてみんな揃いも揃って血気盛んなの!? 喧嘩っ早いにもほどがあるでしょ!」

思わずわめくが、それでも冷え冷えとした空気が和らぐことはない。

美来は頭を抱えた。

「どうしてこんなことになっちゃったの……?」

唇を戦慄かせて呟く。

美来は何かに継りたい気持ちになって、空を仰ぎ見た。

今宵は新月。月はない。本来は美しく瞬くはずの星も低い雲に覆われて、その姿を確認することができなかった。

そもそもこんな事態に陥ってしまった原因はなんだったのか。

威嚇し合う猫と犬の群れを前に、美来は過去の出来事を思い出していた――

第一章 変動の兆しと、思わぬ食客



新月のわんにゃん戦争が勃発する一ヶ月前。

季節は秋に入った九月初めの日曜日。美来が働く猫カフェは、その日も盛況だった。東京郊外の街の一角にある『ねこのふカフェ』。

昭和の匂いが色濃く残っていた流行らない喫茶店から心機一転し、猫カフェにリニューアルした店である。それから一年と三ヶ月が過ぎた今も、客入りの良さは変わらない。いや、むしろ日進月歩の勢いを見せていた。

「いや、それにしても素敵なお店ですね！ ナチュラルな雰囲気、ファンシーさが控えめなところが、男女年齢問わず入りやすい店構えだと思います！」

カウンター席に座って、熱心に語る女性は、とあるタウンマガジンのライターらしい。巷で人気の猫カフェとして取材したいと、アポイントを取って来店したのだ。一ページを使つて宣伝してくれるという話である。

「ええ。猫好きの方は老若男女問わずいらつしやいますから、どなたでも気軽に入つていただけるよう、店のデザインにはこだわりました」

ライターの相手をしているのは、カウンターの内側に立つ、美来の父親だ。

鹿嶋源郎。

年齢は四十九歳。痩せ型の長身で、短い黒髪を横分けにしている。トレードマークは綺麗に整えられた口ひげであり、人からよく『文壇関係のご職業ですか？』と聞かれることが多いが、文才はまったくない。

何よりもコーヒーマスターの味にこだわる『ねこのふカフェ』のマスターだ。この店で提供しているドリンクとケーキ以外のフードはすべて源郎が担っている。

「口コミによると、コーヒーマスターにも人気があるお店だそうですね。猫カフェはランチタイムからで、午前中はモーニングメニューを出す、普通の喫茶店ですね」

「猫キャストの体調を何よりも優先しなければなりません。お客様は皆、ご理解のある方ばかりで感謝しています。モーニングは、リーズナブルなお値段で一日の活力になるような朝食を提供できるよう尽力していますよ」

ライター相手に、にこやかな営業スマイルで会話している源郎を横目に、美来はヒ

ヤヒヤしていた。

(お父さん、緊張してるなあ。ポロを出さないといいけど……)

なにせ、この猫カフェは、ただの猫カフェではない。なんとしても隠し通さなくてはならない前代未聞の秘密が隠されているのだから。

それなら取材など受けなければいいのに、と言うなかれ。

タウンマガジンの一ページを独占できるというのは、集客に繋がるのだ。すでにタウンマガジンの編集部と打ち合わせは済ませていて、インタビュ記事の下部には、割引券を掲載してもらうことになっている。

ちなみに『ねこのふカフェ』は時間制限ありの、チケット料金制だ。

美来の心配通り、源郎は余裕ある受け答えをしているように見えるが、体は緊張のあまり、直立不動の状態で固まっている。

「やっぱりお母さんに対応してもらったほうが良かったかなあ」

思わず美来が呟いた時、源郎の頭に猫が一匹、ストツと飛び乗った。

アメリカンショートヘアらしき柔らかいグレーの毛並み。キュツと目じりが上がったアーモンド形の目は大きく、さらさらとオレンジ色に輝いている。

「ニヤーン」

甘えた声色には不思議な艶やかさがあって、心まで蕩けてしまいそうだ。

「わっ、ジ、ジリン。今は大事な話をしているから、あっちに行つてなさい」

源郎が慌てて頭を手で払う。するとジリンと呼ばれたアメリカンショートヘア風の猫は颯爽と源郎の頭から飛び、カウンターにストツと降りた。そして女性ライターの膝にスルリと滑り込み、ゴロゴロ喉を鳴らして体を擦り寄せる。

「ひゃわわ！ かわっ、可愛い〜！」

途端に目じりを下げてデレデレしたライターは、インタビュもそこそこに、ジリンの背中を撫で始めた。

「この美人猫が、ねこのふカフェの看板猫として有名なジリンちゃんですね。本当に口コミ通り、すごく人懐こいですねっ」

語尾にハートマークが見えそうなほど、ライターの声は弾んでいる。

源郎は「ハハハ」と笑って、頭を掻いた。ジリンの横やりのおかげで、緊張が少しほぐれたようだ。

カウンターからヒョコツと顔だけ出したジリンは、そんな源郎を横目で見て、「まっ

たく、世話が焼けるんだから」と言わんばかりに小さな肩をすくめる。

ジリンが源郎の頭に乗ったのは、猫の気まぐれではない。『源郎のフォローに回る』という確固たる意思を持って介入している。

なぜそんな気配りができるのかと言うと、ジリンは普通の猫ではないからだ。

その正体は、江戸時代より生きる猫又という妖怪である。ゆえに、人の言葉を理解できるし、人の言葉を話せるし、なんと人間の姿に変身もできる。

「ウニヤアアゴ」

ライターが笑顔でジリンを撫でてしていると、店の奥から低い猫の鳴き声が聞こえた。

それは思わず振り向いてしまうほど、迫力のある声。まるで中年のおじさんが猫のものまねをしたかのような、酷いダミ声である。

ライターはハッと顔を上げて声のほうを振り向いた。そのタイミングで、役割を終えたとばかりにジリンが床に飛び降りる。

「一度耳にしたら、二度と忘れられないという噂のダミ声……！ あそこの台座に座っているのが、『ねこのふカフェ』の守護神、ウバ様ですねー」

一気にテンションが上がったライターに、源郎は苦笑いで「そうです、ハハハ」と

頷いた。

「すごい！ このデブ猫ぶり！ 目つきが悪くて滅茶苦茶上から目線で、台座から微動だにせずふんぞり返るそのお姿。まさしく守護神に相応しい貫禄ですね」

「にゃーん、ニヤア、ウニヤツ」

ウバは人の言葉を話すかのように鳴いて、何事か訴えている。

ベルシャ猫を思わせる、ふわふわの白い長毛が特徴的な巨大猫。その体躯はジリンの三倍はある。もうひとつ特徴をあげるなら、見入ってしまうほど美しい金色の瞳だろうか。目つきが悪く、今ひとつ相貌が整っていないのだが、奇妙な愛嬌きょうの持ち主だ。

台座に座るウバは目の前にある小さな賽銭箱さいぜんばこを、太い前足でトントンと叩いた。

その何かをせびる仕草を見たライターは、ポンと手を打つ。

「なるほど！ これがウバ様のお賽銭おねだりですねー」

『ねこのふカフェ』には、守護神の猫様がいて、お賽銭を催促さいせきする。

この店に人気が出た理由のひとつだ。まるで言葉を理解しているみたいに、人間味溢れる仕草をしてみせるウバは、たくさんのお客様に笑いと癒いやすしを振りまいている。

ライターはさっそくウバの座る台座に近づいて、財布から百円を取り出し、チャリンと入れた。

「ウニャー！」

その途端、ウバは二本足で立ち上がる。巨大猫なので、立ち上がるとかなりの迫力だ。そしてウバのふくよかな体に隠れていた三匹の子猫が、ミャンと顔を出す。

「ぎゃわい!？」

ライターが妙な奇声を発した。『ギャア』と驚く声と『可愛い！』という声が合わさったらしい。まさか子猫が出てくるとは思わなかったのだらう。

ウバは自分の後ろに隠していた小さなラジカセのボタンを、尻尾でカチリと押す。唐突に流れる音楽は、神社などで聞く機会のある、雅楽だ。その音楽に合わせてウバが巨体を揺らし、ピシッと前足と後ろ足を上げポーズを取る。そんなウバの周りを、三匹の子猫がクルクルうろろうして、まるでウバを応援するみたいに「ミャンミャン」と鳴いた。

「子猫かわ……っ、えっ、踊……ッ……まじダンス？」

思わず素に戻ってしまったライターがあんぐりと口を開ける。ひとしきり踊ったウ

バは、尻尾でラジカセのボタンを押して音楽を止め、何事もなかったかのように無表情で定位置に座った。子猫たちもウバの毛に埋もれてぬくぬく暖を取る。

「ウバちゃん、すごいでしょう。芸達者なんですよ。」

ライターの傍に来て、ニッコリと笑顔で話すのは、花代子。美来の母親だ。

『ねこのふかフェ』は基本的に、源郎と花代子と美来という、親子で営業している。おっとりした口調の花代子にライターは「そ、そうですね」と相槌を打つ。

「芸、というカテゴリーを超えていそうですね。実際に見ると大迫力でしたね。」

「前に、ウバちゃんと一緒に神社へ参拝したことがあったんですよ。その時に巫女さんが踊っていた舞を覚えちゃったみたいですね。」

「かしこいんですね。さすが守護神様です。」

花代子の説明を聞いて、ライターが感心した顔で頷いた。

だがしかし、ウバは猫にしてはかしこいのではない。猫の振りをした、正真正銘の神様なのだ。江戸時代より存在し、元は近くの山にある社に棲んでいたのだが、時代が経つに連れて人はウバを忘れていき、人々からの信仰心を失った彼女は神としての力を失ってしまった。

孤独を感じたウバは、彼女曰く『気まぐれ』で山を下り……そして、美来に拾われた。

そうして、今は『ねこのふカフェ』の（裏）主人として、カフェを見守っている。つまり守護神というのは冗談ではなく、本当の話なのだ。

ライターは後ろを振り返った。

盛況なカフェでは老若男女、様々な客が源郎の淹れるコーヒーや紅茶を楽しみ、彩り豊かで写真映えのするオシャレな日替わりランチに舌鼓を打っている。

そして何よりも客を喜ばせているのが、愛嬌のある人懐こい『猫キヤスト』だ。

「ニャアーン」

女性客の足元に擦り寄るのは、雄の三毛猫。

「あく、モカくん。こんにちは、モカくん」

「ニャン」

モカは甘くねだるような鳴き声で返事をして、翡翠色の瞳をきらきらと輝かせる。女性客は食事の手を止めて、モカを抱き上げた。モカはぐるぐると喉を鳴らして、尻尾でパタパタと客の足を柔らかく叩く。

「うう、可愛い！」

「私もモカくん抱っこしたいよ！」

向かいに座っていた客が不満そうな声を出すと、モカはビクツと耳を揺らして顔を上げ、招き猫の如く前足を掻いた。

「にゃ、ニャ、ニャン」

「あはは。もうちょっと待って、って言っているみたい」

「本当だ！ じゃあもうちょっと待つから……抱っこさせてね？」

「ニャン」

モカは目をキュッと細めて優しく鳴く。抱っこしていた女性客は「たまらん！」と叫んで、モカの背中に頬ずりする。

一方で、少し離れたテーブル席には、ノートパソコンを開いているビジネススーツ姿の男性が座っていた。

猫カフェにはそぐわないほど、その姿は厳つい。しかも険しい顔をして、忙しそうにキーボードを叩いている。

「なあーん」

そんな彼の近くで、控えめな鳴き声をした。

男の傍に寄ってきたのは、目が醒めるほど真つ黒な毛並みを持つ黒猫だ。宝石のように綺麗なアイスブルーの瞳が、まっすぐに客を見つめている。

「む……っ」

タアンとエンターキーを押した男と、黒猫の視線がバチッとぶつかる。

男はグッと眉間に皺を寄せ、しかめ面をした。

まるで猫が嫌いだと言わんばかりの渋面。しかし男はすぐさま椅子から降りるとその場で膝を折り、黒猫に向かって両手で『おいでおいで』をする。

「キリマたん……！ 僕の癒しのすべて！ さあ僕の胸に飛び込んでおいで！」

——全力で猫好きであった。この男性客は、美来が顔を覚えてしまったほど、ほぼ毎日来店する生粋の猫好きである。しかも黒猫のキリマがお気に入りなのだ。

キリマは一瞬、嫌そうに顔を背けた。すると、美来と目が合う。

『これも、仕事か？』

『頑張れキリマ！ あとでブラッシングしてあげるからね！』

キリマの心中を察した美来は応援の意味を込めて拳を握った。キリマは仕方なさそ

うにため息をつく。

そしてめいっばいの営業スマイルで、男の胸に飛び込んだ。

「ニヤーン！」

「ホホーイ!! キュート！ エクセレント！ キリマたんはエンジェル！」

先ほどの厳めしさはどこへやら。男はデレデレに蕩けた顔をして、キリマを抱き上げる。そして椅子に座ると、キリマの背中を優しく撫でた。

「ああ癒される。癒されるよ。もはや僕は、君なしでは生きていられない。君に会えるから、午後の仕事も頑張れるんだ、うう」

重い。猫好きのお客さんには、時々これくらい感情の重い人がいる。

キリマは男にされるがままになりながら、がつくりと小さな肩を落とした。妙な客に好かれてしまったと、げんなりしているのだろう。

それでも、気まぐれに逃げたりはしない。

キリマやモカもまた、猫であって猫でないからだ。

モカは、仙狸と呼ばれるけけ猫で、元々、美しい男性に変化して人間の女をだまし、精を吸い取る悪い妖怪だった。

キリマは四匹の化け猫の中では一番の年長者で、平安時代より生きる鬼だ。『猫鬼』と呼ばれていて、人間から病を取り込み、それを『死病』として蔓延させる、とても邪悪な鬼である。

ジリンも江戸時代には花魁に化けて男をだまし、贅を尽くして好き放題していた過去があり、三匹とも基本的に『悪い物の怪』だった。かつて、そんなキリマたちを退治し、神使として自分の手駒にしていたのが、ウバ——猫神なのだ。

ウバが人からの信仰心をなくして力を失った頃、神使として使われていた化け猫たちは、一齐に彼女のもとを逃げ出した。それからしばらくの間は離ればなれだったのだが、何の縁か、この『ねこのふカフェ』で四匹は再会し、こうして猫キャストとしてカフェを盛り上げている。

これが『ねこのふカフェ』のトップシークレットだ。

ウバたちが猫の振りをした物の怪であることは、最初は美来だけの秘密だったけれど、今では源郎と花代子も知っている。

何でもあつげらかと受け入れる花代子と違って、非現実的な出来事を認めない源郎はなかなか奇妙な現実を受け入れることができなかったが、さすがに最近は、少し

は慣れた様子だ。

「すごいですねえ。猫ちゃん全員が人懐こくて、可愛くて……まるで人の言葉を理解しているみたいだし、こんなに愛想がいいなんて、びっくりしました」

「たまたま、そういう猫と巡り会えたようですね」

ライターがあつげにとられた顔で言うので、源郎は愛想笑いをしながら全力でごまかす。

実は、本当に人の言葉を理解しているんです。愛想がいいのは仕事だからです。揃いも揃って化け猫のくせに、妙にプロ意識が高いんですよ、こいつらは——

そう言いたいのを必死に我慢しているのか、彼は苦虫を噛んだような顔をした。

「想像していた以上に素敵なお店ですね。これは紹介のしがいがありますよー！」

ジリンやウバですっかり心癒されたライターが、機嫌良く話す。

「それじゃあ、楽しみにしていたオヤツをあげてみましょうか。すみませんが、猫用オヤツを頂けますか？」

「カリカリは一袋で百円。チューブタイプのオヤツは一個で二百円ですが、いかがいたしますか？」

対応したのは花代子だ。ライターは少し悩んだあと、ニッコリと笑顔を見せる。

「じゃあチューブのほう、ひとつください」

ウェットな練り餌ねえの入ったチューブタイプのオヤツは、カリカリよりも割高だが、猫のウケは総じて良い。ライターもそれがわかっているのだらう。

チューブタイプのオヤツが貰える――！

その途端、ウバ、ジリン、モカ、キリマの目がギランと光る。

「ウニヤアーツ！」

「ミヤーン」

「ニヤンニヤツ！」

「ニヤー！」

四匹全員が一斉に飛び上がって、ライターの下に駆け寄った。そして足元でぐるぐると回ったあと、それぞれが得意技を決めていく。

割高なチューブタイプのオヤツは、なかなか猫キャスト全員分は用意してもらえない。だからみんな必死だ。ウバはドッスンボタンとその場でジャンプし、子猫たちがそのたび、ウバの背中でバウンドする。

ジリンは艶めかしく魅了まぼろしするような声で「ナーン」と鳴いて、ライターの頬に鼻チュツをしようとするし、モカはクルンと宙返り。キリマは二本足で立ってクルクルと回ったあと、バク転する。

「ニヤツ！」

「ニヤー!!」

オヤツは俺のだ！ いいや僕が貰う。あたしのものよ！ おぬしら黙らんか。それはわらわのオヤツじゃ！

そんな声が聞こえてきそうなほど、必死に芸をする猫たち。

その光景を他の客も呆然と見て……

やがて、モカを構っていた女性客たちが血気盛んに立ち上がった。

「モカくんたら！ そこまでオヤツが欲しかったのね。店員さん、あたしにもチューブのオヤツ一個ください！」

「キリマたん……！ 君のためなら、僕の残り少ないお小遣いなんていくらでも払うよ。ほらおいで。店員さん、チューブタイプのオヤツ、二個！」

ビジネスマン風の男も手を上げる。次から次へと注文が来て、商売上手な花代子は

ニコニコと対応した。さりげなく猫ウケの良いオヤツを割高にしている辺り、相当なやり手だと美来は思う。

「なんか……今、明らかに猫っぽくない芸を見たような……?」

ライターが困惑の表情で首を傾げた。

猫は宙返りをするだろうか。バク転するだろうか。あからさまに媚びて鼻チユツをするだろうか？

美来はそっとライターに近づいて、囁く。

「げ、芸達者、なんです。えへへ……すごいでしょう。頑張つて教えたんですよ」

本当は教えてなどいない。むしろ美来は『あんまり猫らしくない芸を見せないで』と毎回注意している立場だ。しかし化け猫たちはすぐ調子に乗るし、あのようにオヤツの争奪戦となれば、こぞって芸を競い合ってしまう。

(今夜も、注意しないとなあ)

そんなにオヤツが欲しいなら、閉店後にちよつとあげるとフオローも入れておかないと。美来がそう考えていると、ライターは納得顔で頷いた。

「なるほど。猫に芸を教えられるなんて、すごいですね」

ニココリと美来に微笑んで、花代子から購入したオヤツのパッケージを切り、ジリンに向かってペーストタイプのペットフードをひねり出す。

「ニヤふつ、ニヤウニヤウ……」

上機嫌でべろべろと餌を舐めるジリンの姿に、ライターの疑念は消え失せたようだ。すつかり蕩けた顔で、ジリンを見つめている。

「ウニヤツッ！ ニヤー!!」

モカは女性客、キリマは男性客。それぞれオヤツを貰っている中、唯一食いっぱぐれてしまったウバは、必死にライターの背中をポスポス叩いていた。そんなウバの周りで、子猫たちがミャーミャーと鳴いている。

「ああ、ごめんね。あとであげるから、ちよつと待ってね」

「……ニヤン」

その言葉に、ウバは渋々といった様子で返事をし、台座に戻っていった。三匹の子猫もついていく。

「——本当に、言葉が通じているみたいだなあ……」

ボソツと呟いたライターの一言で、美来の背中にサツと冷や汗が流れた。

インタビュールは大切な宣伝になるが、本当にヒヤヒヤする。美来がチラとカウンターのほうを見たところ、源郎は頭痛がすると言わんばかりに、額を手で押さえていた。



閉店の時間になって、店の玄関に『CLOSE』の札がかけられる。

花代子と美来はフロアの掃除、源郎は調理場の片付けを始めた。

「今日はタウンマガジンのライターさんが来て緊張したけれど、概ね盛況でよかったですね」

鼻歌を歌っていた花代子が、モップで床を拭きながらニコニコ顔で言う。花代子は基本的にいつも笑顔だ。

「最近ほ、足繁く通ってくれるお客さんも増えたね」

美来はテーブルにアルコールスプレーをかけて拭きつつ、答える。

「そうだな。モーニングタイムの常連客も増えたと思う。昔は高齢者ばかりだったが、

最近では若い人やサラリーマンも多くなったな。ちょっと、メニューを検討し直そうと考えているんだ」

調理台を掃除している源郎が、相談を始めた。

「今は、トーストとゆで卵、サラタとヨーグルト、ドリンクのセットだけだったけど？ 確かに、男性には物足りないかもしれないね。ガッツリ肉を食いたいとか、たまには朝カレーがいいとか、時々意見を貰うよ」

「そうね。選ぶ楽しみがあるのはいいと思うわ。ランチのカレーをモーニングメニューにも入れてみてはどうかしら」

美来や花代子が意見を出すと、源郎は「なるほど」と頷いた。

「となると、カレーの仕込み時間が今より早くなるわけか。うーむ」

「早めに寝たらいいじゃない。それか、夜のうちにやっちゃってしまってもいいわね」

花代子の提案を聞いた源郎が「確かにな」と呟く。

「わかった。とりあえず明日は、早起きして仕込みしてみるよ」

カフェの経営について気軽に会議ができるのは、家族経営ならではのだからかもしれない。閉店後はいつもこうやって、後片付けをしながら反省会をしているのだ。

そして、反省会は人間だけがやるものではない。

「あゝもう、なんだよ。あの客は。ここ最近、連日来るじゃねえか!!」

カウンターの上でわめくのは、黒猫の姿をした猫鬼のキリマ。

「君はもう少し愛想を振りまくことを覚えたまえ。客を選ぶようでは、一流の猫キャストとは言えないぞ」

先端が二股に分かれた尻尾を交互に揺らしたモカが、静かに苦言を口にする。キヤットタワーのカゴの中で寛ぐ彼を、キリマがギロリと睨みつけた。

「モカ！ お前は女性客のところに行かねえじゃねえか！ おかげで俺が、男性客を中心に媚び売るはめになっているんだぞ！」

ニヤーツとキリマが怒り出すも、モカは素知らぬ顔をして、前足で顔を洗う。

「仕方がない。僕の本能は常に女性を求めているのだ」

「うわあ、そうやって開き直るところ、さすがは女をたらし込んでプイプイ言わせていた悪辣化け猫なことはあるわね。元チャラ男っていうか」

根元から二股に分かれた尻尾をユラユラ振るジリンは、カウンターの上面お行儀よく座り、モカを横目で見てニヤーツと笑う。

「モカとて、あなたには言われたくないじゃ。あの物書きがオヤツを買った時のジリンの甘えた声は、かつて武士どもをたらし込んだ艶声とそう変わらんかったぞ」

台座にのっしり座るウバが、呆れた声で言った。

ジリンは「にゃふっ」と笑って、尻尾を艶めかしく揺らす。すると、先端がポウとホタルを思わせる光を発した。

「あたしは接客のプロだもの。相手が男でも女でも、みいんなあたしの魅力で骨抜きにしてあげているのよ。この店のお客は、ちよろすぎて術を使うまでもないけどね」

「ぶっそんな術とか、絶対に使わないでね」

美来は、好き勝手に話す猫たちの輪に入り、グサツと釘を刺しておく。

「ジリン、そこをどいてよ。カウンターを拭くから」

アルコールスプレーを片手に近づくと、ジリンはあからさまに辟易とした表情になった。

「前から思ってたけど、そのあるこーる除菌って必要なの？ すっごく嫌な臭いがするわ！」

「食べ物扱おうお店なんだから、除菌は必要でしょ。匂いが嫌なら家に戻っていなよ」

「そうね。そろそろご飯の時間だし。みんな、ご飯にするからおうちにいらっしやい」
 モップ掃除を終えた花代子が、パンパンと手を叩く。その途端、ジリンにモカ、ウバが一斉にビクビクッと耳を揺らし、起き上がった。

「は〜い！ 行く行く〜！」

「今日のご飯は何かな。たまにはカリカリ以外も食べたいものだ」

「外側がカリッとして、中からトロリと柔らかいものが出てくる、あのきゅつとふ〜どがまた食べたいのう。ほれ、エメ、コナ、ブルー。参るぞ」

「みゃん！」

「みゃ〜！」

「みゃう！」

ウバが台座から床に降りると、ドスンと豪快な音がする。そんな彼女の後ろに、名前を呼ばれた三匹の子猫がポテポテと着地した。

「ふぐうっ……」

美来は思わず悶絶もんせつしてしまい、額ひたいに手を当てて愛いとしさに耐える。

ウバの長毛ながみに埋うめると、完全に同化ひたしてしまふ白猫のコナ。ブリテイッシュ

ショートヘアの血が入っていそうな雰囲気を持つ、グレーの毛並みをした雑種のエメ。そして同じく雑種だが、マンチカンの血統が色濃く出ている、キュートな顔が特徴的な茶虎のブルー。

現在生後六ヶ月の彼らは、子猫らしい愛らしさがこれでもかというほど溢れ出ている、美来は店の従業員でありながら、三匹の子猫にめるめるだ。

子猫たちは今年の四月ごろに『猫キャスト』として仲間入りを果たした。主にウバが面倒を見ているのだが、でつぶりした彼女の傍そばで団子だまになってじゃれ合う子猫の姿は、猫好きにはたまらない一景である。

美来だって、仕事を忘れて見入ってしまうくらいだ。客の反応が良いのは当然で、子猫目当てに来る客も多い。

「ウバが子猫の可愛さを一番わかっているところが、なんとも商売上手だよねえ。ひとしきり見せ終わったあとは、子猫を懐なつかしに隠して、お賽銭さいせんねだるんだもん。しっかりしてるよ」

美来はプツプツ吹きつつ、アルコールスプレーをカウンターにシュツシュツとかけ、乾いた布巾ふきんで拭く。

食器を拭き終わった源郎は「そうだな」と頷いた。
 「まあ、子猫どもは真正正銘の猫だし、可愛い反面、何をしでかすかわからねえ。人間の言葉が通じるはずもないから店に出すのは心配だったけど、ウバの面倒見が良くて助かったな」

ふう、と安堵したようなため息をつく源郎。

キッチン側に移動して源郎の手伝いをしながら、美来はクスクス笑った。

「お父さんも、すっかりウバたちに慣れたみたいだね」

「慣れざるを得ない……というやつだな」

ピカピカに磨いたコーヒークップを戸棚に片付けて、源郎は力なく肩を落とす。

「悪いやつらじゃないのはわかってるんだが、ウバは常に偉そうな態度で命令してくるし、ジリンは何かにつけて俺をからかうし、あれだけはなんとかならんもんかね」

「あはは……。あれはあれで、親愛の証あかしというか、みんなお父さんが大好きなんだよ」

ウバは神様だから偉そうなのだろう。ジリンのからかい癖は、もはや本能みたいなものだった。しかし、二匹とも他人には猫を被るので、本性を露あらわわにしているという

ことは、心を許しているのも同然なのだ。

四匹の『物の怪』猫と、自分と両親。なんとも奇妙な取り合わせだが、今のところ、仲良く暮らせていると美来は思っている。

「……そういえば、ウバたちが来て、もう一年半になるんだね」

美来がしみじみ言いながらお皿を片付けていると、洗いカゴに布巾ふきんを入れた源郎が「早いもんだな」と笑った。

「じゃ、俺も家に帰るよ。明日は早いから、さっさとメシを食いたいしな」

「うん。私はもうちょっと掃除したら行くね」

美来がそう言うと、源郎は頷き、裏口から外に出ていく。彼を見送った美来は裏口近くにあるロッカーはつちから箒ほうきとちりとりを取り出し、玄関から外に出た。

「今日は半分……下弦かげんの月か」

落ち着いた声色が、美来のすぐ傍そばから聞こえる。軽く振り向くと、夜に溶け込みそうなほど真つ黒な毛並みを持つキリマが、店の植え込み近くにちよこんと座っていた。「キリマ。……そうだね」

目を細めて微笑んだあと、美来は『ねこのふカフェ』に面する歩道を箒はで掃いた。

「こども、ずいぶん騒がしくなったよな。俺が美来に拾われた頃は、静かなもんだったのに」

「あの頃は寂れた喫茶店だったからねえ。本当に、すっかり様変わりしたよ」
キリマを拾った時のことを思い出して、美来はクスクス笑う。

そう——すべての始まりは、彼との出会いからなのだろう。

今も美来の日課である毎朝の散歩。その道すがら、神社で見つけた捨て猫。それがキリマだった。

喫茶店を営む父、源郎に嫌な顔をされながらも、半ば押し切る形でキリマを飼いはじめて二年が経った。そして美来は、なんの因縁か、同じ神社で再び猫を拾ったのだ。それがウバ——猫の神様である。

「ふふ、キリマが初めて私に話しかけてきた時はびっくりしたなあ」

それまではずっと、キリマは普通の猫だと思っていたのだ。正体は鬼で、猫ではなかったのだが、キリマは美来に嫌われるのを恐れて、単なる猫の振りをしていた。

……あの日、ウバが言葉話を話した瞬間までは。

「まさか美来がウバを拾ってくるなんて夢にも思ってたかったよ」

「因縁の関係だったんだよね。神使……だったっけ？」

「そうだ。俺もジリンもモカも、元は悪い『物の怪』だった。ウバはそんな俺たちを退治して、自分の手足として使役していたんだ。……ま、神様の力を失ったあととは、みんな逃げ出してしまったけどな」

キリマが昔を思い出すように、遠い目をして空を見上げる。

時代がめまぐるしく変わっても、星空と月の形だけは変わらない。平安時代からこの世に存在しているというキリマは、時々空を眺めて在りし日のことを思い出しているのかもしれない。

「流行らない喫茶店を猫カフェにリニューアルするってお父さんが言い出した時は、どうなることかと思っただけど、ウバが『ねこのカフェ』の主人になるって言って、モカとジリンを呼び出してくれたから、あつという間に猫キャストが揃ったんだよね」

「最初は洪ってたけど、雇用条件がよかったからな」

キリマが美来に顔を向けて、目を閉じて笑う。なめらかな尻尾がポンポンと地面を叩いた。

「ねこのふカフェを社に見立てた、お賽銭大作戦の始まりだったねえ」

ウバは、人からの信仰心をなくしたがゆえに、神としての力を失った。

つまり、人間の信仰心を再び集めることができたなら、神の力も戻るのだ。

どうやら、賽銭というのは手っ取り早く信仰心を集めることができる方法らしく、台座と賽銭箱を用意し、ウバを奉る気持ちで賽銭を投げてもらおうと、神の力が少しずつ取り戻せるのだとか。

キリマやジリン、モカは、かつてウバに退治された時、物の怪としての力をすべて奪われてしまった。

『わらわの力が戻れば、おぬしらから奪った力も戻せるだろう』

ウバの一言で、三匹の気持ちは決まった。自分の力を取り戻したい一心で、化け猫たちは気持ちをひとつにして、接客に励んだのだ。

空になったコップに一滴ずつ水を落としていくような毎日の積み重ねにより、ウバは力を取り戻していった。そしてキリマたちに力を返すことができ、彼らはかつての能力をえるようになったのである。

猫又のジリンと仙狸のモカは、人間に変化し、魅了する力を。

猫鬼のキリマは、人間から病を吸い取る力を。

「力を取り戻した途端、ジリンがさらわれたり、黒い猫鬼が現れたり、大変な目に遭ったよねえ」

「……あれはもう、忘れてくれ。なんか、一から十まで思い出すと、恥ずかしさのあまり、ゴロゴロ転がりそうになってしまっ」

キリマがべたと伏せの体勢になって、そっぽを向いた。

美来は思わずクスクスと笑う。

「キリマ、一生懸命だったもんね」

掃き掃除を終えた美来がしゃがみ込んでキリマの頭を撫でると、彼は三角の耳を寝かせて、気持ち良さそうにゴロゴロと喉を鳴らした。

『ねこのふカフェ』が開店して、しばらく経った頃。街では野良猫や飼い猫が失踪するという事件が増えていた。

猫を集めていたのは、八百年もの間、ひとりの女性に取り憑いていた猫鬼。

己の存在を維持するために、猫鬼は猫を体に取り込んでいたのだ。美来たちはその事件に巻き込まれ、ジリンがさらわれたり、美来が死病の呪いを受けたり、それに

よってキリマが自分を犠牲ぎせいにしようとしたりした。

結果的に、美来の機転によって呪いは解かれたのだが……

キリマとしては、体を張って美来を守ったにもかかわらず、逆に美来に救われてしまったので、嬉しいやら恥ずかしいやらと、なかなか複雑な心境らしい。だからあの時のお話が話題に出ると、キリマはすぐに雲隠れしようとする。よほど思い出したい過去のようなのだ。

あの事件があったて、源郎や花代子もウバたちが『物の怪』であることを知った。

花代子は面白がったが、源郎は冗談みたいな現実をなかなか受け入れることができず、しばらくの間、頭を抱えていたものだ。

だが、ジリンとモカがしつこく源郎に構ったことで、ようやく現実を受け入れることができた様子。やや荒療治に近かったが、今ではすっかり受け入れているので、結果オーライかもしれない。

ちなみに、コナとエメ、ブルーの三匹は、件の猫鬼くたんが取り込んでいた猫である。どうやら三匹とも野良猫だったらしく、引き取り先が見つからなかったのだ。

そんなわけで、美来は三匹の猫をペット兼猫キャストとして飼うことを決めたので

ある。

幸いと言っているのか、ウバが世話役みずかになを自ら担い、子猫たちもウバを母猫のように慕っている。キリマが言うには『神様は基本的に面倒見がいい』のだそうだ。

「私はね、今がとても幸せだと思っているよ」

美来は柔らかく、手触りの良いキリマの小さな頭を撫でて、人差し指で喉をさする。
「うう……」

キリマが目を瞑つぶってゴロゴロと喉を鳴らす。彼は鬼であると同時に猫なので、気持ち良く撫でられると、本能的に喉を鳴らしてしまうのだ。

「キリマがいて、ウバがいて、ジリンとモカがいる。お父さんとお母さんと私で、仲良く猫カフェを経営している。この現実がね、夢みたいに幸せだなあって思っているんだ」

「……俺も、幸せだよ」

美来に抱き上げられたキリマがボソツと呟いた。そして夜空あおを仰ぎ、アイスブルーの瞳まなこでどこか遠くを見つめる。

「永遠えいゑんに続いてほしいくらいだ。でも時々、この幸せが怖くなる」

「え、怖いのか？」

美来が尋ねると、腕の中でキリマはしゅんと頭を垂れた。

「ああ。物事には必ず終わりが来るからな。だから俺は、いずれ来る幸せの終焉しゆうげんに恐怖している。何よりも美来と離れることが……怖いんだ」

キリマは、いずれ来る別れを予感しているのかもしれない。

美来は、猫鬼の寿命を知らない。だが、前に出会った猫鬼は、八百年の時を生きていた。だから、美来が年を取って生涯を終えてもキリマは生き続けるのだと思う。

「そっか……。動物の猫と違うのは、ある意味では辛いことなんだね」

普通は、残される側は人間であるはずだ。猫の寿命は、人間よりも短い。けれども、相手が猫鬼となれば立場が逆になるのだろう。

キリマを優しく撫でていた美来は、ぎゅっと彼の体を抱きしめる。

「私は、キリマのその気持ちにどう答えたらいいかわからないけれど……」

先に死んでしまう立場としては、どんな言葉をかけても無意味に思えた。

キリマをひとりぼっちにしたくない。

彼を置いて死にたくない。そんな気持ちは持っているけれど、できないことは口に

したくない。

だから美来は、ニッコリと笑顔になって、キリマを見つめた。

「今の私にできることは、キリマやみんなと、仲良く楽しく生きることだと思っよ。先のことを考えて……悲しみながら生きるのは、辛いことだから」

人差し指でキリマの鼻先をさすると、彼はくすぐったそうにブルブルと首を振る。

「……そうだよな。俺も、そう思う」

キリマは静かにそう言って、顔を上げた。

形の良い三角形の耳がびるつと動いて、アイスブルーの瞳が美来に向けられる。

「ごめんな。俺、どうしても悲観的になってしまみたいだ」

「キリマは私より長生きだもん、仕方ないよ」

クスクス笑って、美来はキリマの顔に頬を寄せた。猫独特の、ふわふわの匂いを胸いっぱい吸い込んで、ゆっくり目を閉じる。

「長生きだから仕方ないって……どういうことだ？」

美来の顔にすり寄りつつ、キリマが尋ねた。

「私のおばあちゃんも、時々悲観的だったの。年を取ると、物知りな分……なかなか

ポジティブ思考になれないんだろうねえ」

すでに故人となつている祖母を思い出しながら美来が言うと、ゴロゴロと喉を鳴らしていたキリマが、ピクツと耳を震わせた。

「ちよつ、ちよつと待て！ 俺を年寄り扱いするな！」

「え、おじいちゃんじゃないの？ だつて平安時代の生まれなんでしょ？」

「おじいちゃんって言うなあ！」

夜の静寂に、キリマの切ない慟哭しうきくが響く。

「でも、平安時代から生きてるなんて、人間からしたらかなり長生きだし……」

「人間と一緒にするな！ まったくもう」

キリマは憤然と三角の鼻を鳴らし、プイツとそっぽを向く。

翳かげつていたキリマの表情が幾分か明るくなつて見え、美来は優しく目を細めた。

彼の小さな頭を撫でてから、箒ほうきとちりとりを片手に店へ戻る。

その間際、キリマはそつと横目で空を見上げた。

黒い空。ちらほらと瞬またたく星と、下弦かげんの月。

「……今、この時が。俺の生涯において、一番の幸せなんだろうな」

まるで大切な宝物を守るように。おいしいごちそうを噛みしめるみたいに。

美来に抱かれたキリマは、静かに目を伏せた。



残暑もようやく落ち着きを見せて、過こしやすいい気候が続く秋晴れの日。

夏休みや冬休みといった長期休暇のある時期は、学生の客も多く、それなりの集客が見込めるけれど、秋の連休といえはシルバークライクくらいなものだ。

そんな事情もあり『ねこのふカフェ』の客入りも、基本的に落ち着いている。もちろん土日や祝日は忙しいが、平日は暇な日さえある。

「これが人の多い地域だったり、京都みたいに観光地だったりしたら、また話は違うんでしょうけどね」

今日の美来は、仕事が終わるまで。そして隣を歩いて話しているのは、同じく仕事休みの桜坂さくらざかである。

「でも、あんまり忙しすぎるのも困りものですよ。猫だつて毎日愛想を振りまいたら

疲れまずからね」

久しぶりの外出に、美来の声は弾んでいた。

桜坂は、以前美来が働いていた猫カフェのオーナーで、スキンヘッドの頭に筋骨隆々の体という、なかなかパワフルな見た目の男性だ。

しかし心は乙女で、店で飼っている猫キャストにも懐かれている。気配り上手で親切な、とても優しい人だ。

今日の桜坂は、黒いニット帽を被り、シンプルなカーキ色のジャケットを羽織って、焦げ茶色のライダーパンツを穿いていた。

店での可愛いエプロン姿も似合うけれど、ちよつとワイルドな格好も似合う。

美来が桜坂の姿を見ながらそんなことを考えていると、彼はチラと美来を横目で見、意味深な笑みを浮かべた。

「化け猫ちゃんも、接客疲れになるのね」

「なりますね。接客好きなきりんや、芸をする以外は動かないウバはそこまででもないですが、接客に慣れていないキリマとモカは心労が溜まるようです」

美来は苦笑いで答える。

——そう。桜坂は、ウバたちが『物の怪』の類であることを知っているのだ。きっかけは、犯人が猫鬼であった、猫失踪事件である。

たまたま現場となった『ねこのふカフェ』に居合わせた桜坂は、猫鬼が死病の呪いを美来にかけた瞬間も、ウバやキリマが喋ったところもしっかり目撃してしまったのだ。

彼は『ねこのふカフェ』が隠し持つ秘密を知っている、唯一の部外者。

「久々に、化け猫ちゃんたちに会いたいわあ。私、ジリンちゃんとお話するのが一番楽しいの」

「確かに、ジリンとオーナーは気が合いそうですね」

「そうなの！ ジリンちゃんの花魁時代の話を聞くのは楽しいし、モカちゃんの理知的でいながらウブなボーイっぽいところもたまらないわ。キリマくんのストイックな雰囲気も素敵！ ウバちゃんは神様だけあって貫禄があるわよね。みんな個性的で大好きよ」

ルンロンといった様子で話す桜坂は本当に心が乙女だ。筋骨隆々な体で拳を組み合わせ、くねくねと腰を揺らす。

「でも、美来ちゃん、だめよ？ 私はもうあなたのオーナーじゃないんだからね。ちゃんと名前で呼んでちょうだい。」

「す、すみません。つい癖でオーナーって呼んでしまっんです。頑張って、桜坂さんって呼ぼうと思うんですけど……」

「まあ、私の猫カフェで二年は働いていたものね。癖になっていたら仕方ないか。でも、早めに桜坂って呼んでね。もしくは司右衛門と名前で呼んでもいいのよ？」

「し、司右衛門は……。はい、桜坂さんって呼べるように頑張りますね」

こんなにも乙女な彼女なのに、名前はとことん厳いついなんで、皮肉なものである。

さて、美来と桜坂がこうして街を歩いているのは、特にデートというわけではない。隣町に、保護猫カフェというのできたらしいのよ。ちよつと見に行ってみない？』

そう、桜坂に誘われたのだ。

保護猫カフェとは、その名の通り、猫カフェを経営しながら猫の引き取り手を探しているお店である。

飼い主を探すという点は自分たちの店と違うものの、猫カフェとして経営している

のなら、店はどんな雰囲気なのか、客層はどうなのか。美来も少し前から気になっていたの、桜坂と一緒に偵察に行くことにした。

なにせ、美来たちが住む街は、東京都内ではだいたいぶ端のほうにあり、都会の雰囲気は皆無である。つまり、都心ほどの集客が見込めないの、客の争奪戦がそれなりにあるのだ。

そして、隣町にできた保護猫カフェは、SNSサイトなどで精力的に発信していて、インターネットでの動向を調べる限り、なかなか人気が高かった。

保護猫の引き取り手は見つかってほしいと願うものの、自分の店に通ってくれる常連客が隣町の保護猫カフェに取られては困る。

『ねこのふカフェ』も、SNSやブログはこまめに更新しているが、悲しいことに鹿嶋一家は笑いのセンスに恵まれていなかった。なかなか面白いことが書き込めないのだ。

一方、保護猫カフェのSNSは、とても面白いスタッフがいるのか、笑いに溢れたコミカルなメッセージが、よく話題になっている。

その店は、『ねこのふカフェ』の最寄り駅から電車で二駅。駅の傍そばには昔ながらの

商店街があつて、数々のノボリがたなびく歩道を五分ほど歩くと、目的の店が見えてきた。

「着いたわ。ここね」

「ええ。ちなみに店の目玉ランチは猫型のオムライスで、それ以外だと、パフェが人氣メニューみたいです」

「パフェ！ 女の子が大好きなスイーツじゃないの。なかなかやるわね。それじゃあ潜入捜査、行くわよっ！」

意気揚々と、桜坂が保護猫カフェの玄関を開く。

だが、それから一時間後――

「やあ〜ん。本当にカワイイ！ さては天使！ それも大天使ね。こんにゃろ〜、モフモフしちゃうぞ〜！」

店内に、成人男性の裏声が響く。それはまごうことなく、桜坂のものであつた。

「にゃ〜ん」

「うにゃ〜」

全面、絨毯張りのフロア。テーブル席は端に並べてあり、広い真ん中のスペース

はすべて猫と戯れられる広場になつている。

桜坂が正座する周りには、様々な毛色の猫たちが集つていた。人懐こい猫ばかりのようで、膝に乗ったりスリスリしたりと、自らスキンシップに来てくれたのだ。

「人慣れしてますね。可愛い〜」

かくいふ美来も、わりとデレデレだった。

猫好きは、場所を問わず、猫に目がないのである。

「当店の猫ちゃんは、元飼い猫が多いんですよ。だから基本的に人懐こいんです」
スタッフがトレーにパフェを載せてやってきて、説明してくれた。

「元飼い猫……つまり、家庭の事情で飼えなくなつてしまった猫たちってことですか？」

美来が尋ねると、スタッフは複雑そうな笑みで「はい」と頷く。

「本当は、ないほうがいいことなんですけどね。できるだけ当店で引き取っています」

「そうなんですけどね……」

美来がなんとも言えない複雑な表情を浮かべていると、スタッフはニッコリ微笑んでパフェのトレーを渡した。

「食事は、向こうのテーブルでお願いしますね」
 「はい、わかりました。ありがとうございます」

トレーを受け取った美来は、桜坂と共にテーブル席に座る。パフェを構成しているのは、香ばしく焼いたグラノーラとヨーグルトクリーム、濃厚そうなアイスクリーム。そしてふわふわの生クリームにはたっぷりのチョコソースがかかっていた。

桜坂がパフェにスプーンを入れる。そして、少し深刻そうな顔をした。

「私もね、さつきスタッフさんとお話していたけれど、二階には、まだお店に出せない猫ちゃんを保護しているみたいよ」

「それも、みんな元飼い猫ってことですか？」

「捨て猫もいるようだけど……そうね。多くは人の手から保護した猫らしいの。世の中は、いい飼い主ばかりではないから、色々あるんだと思うわ」

長いスプーンを手に取りつつ、美来も表情を沈ませる。

「そうですね。見たくない現実ですけど……。いますよね。悪い、人も」

ペットは可愛い存在で、人の心を癒す素敵な家族だ。そして、当然ながら生き物で

ある。断じてオモチャではない。だが、そこをはき違えている飼い主もいるのだ。正しい飼い方はペットの命を守ることに繋がるのに、なかなかわかってくれない人もいる。

ペットを飼うのに、免許はいらない。知識がなくても、アクセサリー感覚だったとしても、動物を家に住ませた時点で即座に飼い主になれる。

その人間が動物を飼う資質を持っているかどうかは、誰にも計れないのだ。

難しい。とても難しい問題である。

美来が眉間に皺を寄せていると、向かい側に座る桜坂が、ポンポンと美来の頭を軽く叩いた。

「これから、可愛いお顔が台無しよ。そういう悲しい存在を少しでも減らすために、こういう猫カフェがあるんでしょ」

「そ、そうですね」

美来は慌てて顔を上げる。目の前では、桜坂が優しい微笑みを浮かべていた。

「私たちはできることをやっていくしかないのよ。ほら、私だって、時々ペットショップで無料の猫の飼い方講座を開いてるでしょ」